

15世紀英語存在文の諸相

numbers frequently called. (O' Hara)

Three Roman soldiers are in a drinking-place at eleven o' clock at night.
(Hemingway)

これらはいずれも普通に書けば *there* 構文になるところであるが、敢えてそれを避け、積極的に 'NP+be' の表現形式を採っていると思われる。例えば、(Crane) では、難破した船を逃れ、命からがら乗り移った小さなボートの中にたまたま一本のタオルがあったという叙述である。その後、少なからざる役を果たすことになる一本のタオルの偶然の存在にスポットが当てられ、劇的な効果をもたらす。あとの2文においても同様な効果を狙った意識的な文体となっている。つまり、これらは *there* 存在文に対して、直接的存在文とでもいうような文体的効果をもつものである。

5) *Donet* では *rise* の1例が出るのみである。

多いが、当然これは小論でも対象から外している。このようなことを考慮すると、ここで云う NP+be (—there) 存在文の頻度は決して多くはない。しかしながら、逆にそのような状況やその特殊性を考慮すれば、決して小さい数字でもない。各テキストにわたって、まんべんなく生起していることから、この時代いわば、「直接的存在文」とでも云うべき独自の文体的特徴をもって、広く使われていたと考えられる。

いま一つ、その後の発達から見ると、存在の there と共起する動詞は be と come 以外にも慣用的にいくつか見られるが、それに比べるとこの時代、多様な動詞が見られる。特に現代英語においては見られない動作性が強い動詞の使用が特徴的である。これは文頭の通常の主語領域を空白にするという there 構文の文体的効果を意識したものと見られ、動作性の強いものがここに現れたのであろう。

〈注〉

- 1) L. E. Breivik, *Existential THERE* (Bergen: University of Bergen, 1983). 杉山隆一「中世英語における there 存在文の発達」『文藝と思想』第 56 号 1992 年 pp.59-72.
- 2) 次のような文が見られる。
 se, here is his tonge in my hande (*GRom.*403) / and heere is beside me a lion, and an ape, and serpent (*GRom.*282)
 ここではいずれも here が同一節内で場所の副詞句と共起している。従って、一見、この here は存在の there に似て虚辞と見えるが、here の場合は there に比べて指示性が直接的であり、それだけ強く、したがって意味的に虚辞となる可能性は薄い。これはふつうに見られる場所の副詞句を先導する副詞の here と見るべきで、特に上文の場合、主語 NP が定名詞であることから there 存在文の一変形と考えることは妥当ではない。
- 3) 各テキスト名の後のかっこの中に小論で使用する略称を示す。
The Book of Margery Kempe (*MKempe*), ed. S. B. Meach, EETS 212 (1940). / *Gesta Romanorum* (*GRom.*), ed. S.J.H. Herritage, EETS ES 33 (1962). / *The Donet* (*Donet*), ed. E.V. Hitchcock, EETS 156 (1962). / *The Revelations of Saint Birgitta* (*Rev. St Bir.*), ed. W.P. Cumming, EETS 178 (1929). / *Mirk's Festial* (*Mirk Fest.*), ed. T. Erbe, EETS ES 96 (1905).
- 4) 現代英語にもこの構文は極めて限られてはいるが、書かれたものの中には見られなくもない。例えば
 A bath-towel was by some weird chance in the boat.(Crane)
 A telephone was there, and in front of the telephone a yellow card of

- (48) Dowtyr, þer is no so synful man in erth leuyng (*MKempe* 23)
- (49) “I leue þer was neuyr woman in Ingland so ferd wyth-þal as sche is & hath ben.” (*MKempe* 134)
- (50) sche had many holy teerys & wepingys, & oftyn-tymys þer cam a flawme of fyer a-bowte hir brest ful hoot & delectabyl... (*MKempe* 219)
- (51) For þer nys no gold yn þys world so precyous to God (*Mirk Fest.*50)
- (52) Then, when Iacob, Ioseph fadyr, herd þat þer was corn to byen in Egypte... (*Mirk Fest.*98)

(44)と(48)は現在分詞をともなったものであるが、(44)はその分詞の位置から現在進行形の形態となっている。本来は(48)に見られるように be 動詞から離れた後位置に配されて主語 NP について敷衍するものである。同じように(45), (46), (47)では過去分詞が、(49), (50), (51)では形容詞がその役を担う。最後の(52)では to 不定詞が見られる。

7. 結語

以上、英語史上、近代英語へ移行する前の段階での there 存在文の発達・熟成の状態の一部を見てきた。ここで今回対象としたコーパスの中での簡単な頻度数をあげると次のようになる。

	-there	+there			Total
		be	come	others	
<i>MKempe</i>	3(1)*	33	37	2	75
<i>GRom.</i>	18(8)	63	25	11	117
<i>Donet</i>	8(1)	5	0	1	14
<i>Rev. St Bir.</i>	7(4)	14	7	3	31
<i>Mirk Fest.</i>	3(1)	32	37	9	81
Total	39(15)	147	106	26	318

(*カッコ内の数字はwh節に起こるもの)

言うまでもなく、場所の副詞(句)を同一節内に含むもの、という条件の枠外にある there 存在文をも合わせると、there 存在文は大きな数字となる。一方、いま一つ、副詞(句)先導による inversion の構文による there なし存在文も

fall の各 2 例と続き、あとはいずれも *Gesta Romanorum* のもので、1 例ずつの abide, arise, hung, hunt, lie, run, start, となっている。特にこれらの一般動詞の場合は be とは異なり、具体的な動作が主題より先に提示されるために、心理的に、後置された主語にスポットが当たるという文体的な効果を生むことから、それを狙って特に物語りの中で多用されたのであろう。

- (37) And as thei wer riding per ran an hynde in pe wey, with a swifte pase (*GRom.313*)
- (38) Aftir, within thre days, ther huntyd an Erle in pe forest (*GRom.313*)
- (39) I wote not of what lady ze spekyn, but per heng a lady by pe heyre in such a forest (*GRom.318*)
- (40) and soone after pis, per stert in to pe same dich an hungry lyon (*GRom.281*)
- (41) On a day as he prayde, there aperid to hym a fourme of a woman (*GRom.383*)
- (42) when pis orisone was y-maad, per ros vp so gret a tempest in pe see (*GRom.317*)
- (43) whenne the bedell y-makid this proclamacion, Ther lay by the wey too feble men, a blynde And a lame. (*GRom.15*)

6. 構文

there 存在文の成熟に伴って、統語的に多様な要素を伴うようになる。この観点からコーパスを見てみると、次のようになるが、ほとんど現代英語と異なるところはない。

- (44) “A! ser,”...“pere is sitting in pe tree suche a brid, pat syngeth swetly... (*GRom.61*)
- (45) If per weere an hous in pe cite I-sette afire, and bigonne to brenne... (*GRom.10*)
- (46) ther come in at the wyndowe a brid, colourid with diuerse colours (*GRom.272*)
- (47) per moste be sette a door on our house (*Rev. St Bir.24*)

- (29) Is þer no Remedy a-yenste that sorye beste? (*GRom.*240)
 (30) hit come to his mynde, how he had I-thought afore in his bed,
 is þere any god but I? (*GRom.*81)
 (31) “Syn all Ioye shall be there, are there any houndes or hawkes?”
 (*GRom.*368)
 (32) Þen sayde þe abbot: ‘Was þer any soule þat ȝede to þe joye
 wythout payne, þat day, þat þou dyddyst dye?’ (*Mirk Fest.* 75)

これは主語と動詞の倒置によって疑問文を生成する方法に則っていることから、この場合これらの *there* が主語 NP に相当する機能を有しているという証明にもなるであろう。

さらに疑問詞に導かれた存在を表わす疑問文はどうであろうか。次のような文が見られる。

- (33) What Ioye is in Paradise? (*GRom.* 368)
 (34) Þe first, how mucche is bytwene good and yuell? (*GRom.* 66)
 (35) Then seid the Emperour, “The vj.th shal distroy him; how
 many daies iourney beth in þe sercle of the world? (*GRom.* 65)
 (36) ffadir, how manye maners ben þere ouer her vndirlingis? (*Donet*
 61)

先に見た(29)―(32)のすべてに見られた *there* はここでは1例のみで、それも意味的には場所の副詞と思われるものであり、*be* 動詞単独による陳述がそのほとんどとなっている。特に(29)、(30)、(31)に対する(33)、(34)、(35)は同一のテキスト *Gesta Romanorum* からのものであることから、数的な不満は残るが少なくともここでは明確な対比が見てとれる。つまり、前者が ‘*there+be*’ の *inversion* で疑問文を構成しているのに対して後者では、疑問詞+*be* 動詞単独の表現形式に止まっており、そのことからここでも存在の *there* の進出が遅れているように思われる。

5. 一般動詞

there 存在文の主動詞として現れる動詞はこの時代、*be* 以外にどのようなものが見られるのかを見てみると、*come* は *Donet* を除くすべてのテキストに見られ、93例と群を抜く。⁵⁾ 次いで *stand* の6例、*rise* の3例、*appear*、*dwell*、

- (22) ..., a-mong which was a monke,...(*MKempe* 235)
 (23) ry3t as non of you woll goo ynto a place peras stynkyng caren
 ys (*Mirk Fest.*156)
 (24) ...,or knowe not what heuen is or what ioies ben in heuen?
 (*Donet* 201)

次の文は場所の副詞句を形成する関係詞に導かれた存在文である。

- (25) ...tyl þei comyn to a watyr wher was meche concowrs of
 pepil... a-mong which was a monke, a ful rekles man & euyl
 gouernyd (*MKempe* 235)
 (26) O cursid be þat modir of him þat had so gret a wombe þat so
 meche water was in. (*Rev. St Bir.* 124)
 (27) Lucius was a wise Emperour regnyd in þe Cite of Rome, yn þe
 hous of whom þer was a nobill knyght (*GRom.* 5)
 (28) in the Empir of whome þere was a knyght namid sedechias
 (*GRom.* 242)

(25)(26)では後続する節に *there* が見られないが、*GRom.* の2例にはいずれも *there* 構文が続いている。なお、*GRom.* にはこの他にも同様に *there* 文が続くものが2例ある。他のテキストではこの種の存在文が見られず、一般的傾向を知るまでには至らない。

いわゆる関係副詞あるいは疑問詞に導かれた節においては、まだ *there* 存在文は極めて少なく、*be* 動詞単独による表現が圧倒的に多い。これは一方で、従節一般では主節に比べて特に *there* 存在文の頻度が落ちるといった傾向が認められる訳ではないので、特に関係副詞節、疑問詞に導かれた節ではこの時代まだ *there* 存在文の進出が遅れているということであろう。

4. 疑問文

Wh-wordsを伴わない疑問文を見てみると、*local adverbials* を伴った *there* 存在文という条件の中では、疑問文は今回のコーパスの中では見られない。しかし、その条件の枠を外すと以下のような文が見られ、いずれも 'there+be' の倒置を伴っている。

なすには時間の経過、その出現が広範であること、決して稀な頻度ではないことなどから無理がある。一つの文体的効果を狙って、意図的に選択されたものであると考えるのが妥当であろう。⁴⁾ 例文(14)では人間の五感の在り抛を述べたものであるが、それぞれの主語 NP の対比が一つのポイントとなるため、文頭主語の陳述形式を採ったものであろう。

上掲の例もそのような観点から、意図的に選択された構文といえるであろう。但し、その場合、文頭が重く、不安定な 'NP+be' のみで終わっていることはまずなく、その後に場所の副詞句等の語句を配し、バランスを保っているのが普通である。その点例文の(13)では NP にかかる *of*-phrase を切り離して、*be* 動詞の後に配し、バランスを保っていると見ることも可能であろう。

- (15) but then vs muste take away the fleshe, *scil.* flesshelye affectious, so that no bloode falle, *scil.* no synne be in vs; (*GRom.* 165)
- (16) ...as many creaturys as in erth *han ben & arn er xal ben & myth ben* be pi myth, and as per arn sterrys & awngelys in pi syght... (*MKempfe* 252)
- (17) Neuyr-pe-les whersoeyr God is Heuyn is, & God is in pi sowle & many an awngel is abowte pi sowle to kepe it bope nygth & day. (*MKempfe* 31)

例文(16)では存在を表わす *be* 動詞の形態に関して、(15)、(17)の文では NP に関してそれぞれ対比的に提示する目的から 'NP+be' 構文を採っていると考えられる。

3. Wh 節

特に Wh 節に NP+be 存在文が目立つように思われる。

- (18) Hit happid pat he thought in a nyght, as he lay in his bed, whethir pere be any god withoute me? (*GRom.* 75)
- (19) the chirch, where mych folk was,... (*GRom.* 387)
- (20) ..., where ben perels of deep (*Donet* 46)
- (21) And by-yonde this place is a-noper place wher is lesse payne (*Rev. St Bir.* 48)

これらはいずれも主格の関係代名詞が考えられるところであり、いわば2文の主格が共有されて結合し、1文となっている。上に見るようにこの時代にも決して珍しいものではない。(Mirk Fest.17) は ‘was cleput’ と be 動詞が見られるが、このような場合、過去分詞のみの形で続くものも極めて普通である。

2. NP+be 存在文

前述のように、there 構文は13世紀の中程より急速にその地歩を固めた。一方、存在の there を伴わない ‘S+P’ の陳述形式に則った be 動詞による存在表現は激減する。現代英語の中ではこのような存在文は極めて稀であり、全く認めない文法家さえ居るほどである。

今回対象とした中英語後期の15世紀散文ではどうであろうか。

- (7) And iij. armyd kny3tys *were* in þe same wey, to fi3te with all pat euer come in þat wey to þe forsaide cite.(GRom. 19)
- (8) “fire *is* in the cite; go ryng your bellis, and steke the 3atis!” (GRom. 63)
- (9) and it was tolde hym, that such ij. *were* at an ale house, and satyn, and dronkyn.(GRom. 420)
- (10) For ryghtwyssnes *is* in God from with-owte begynnyng...(Rev. St Bir. 44)
- (11) For as a knyght that...fyghtyth as longe as only lycour ys in hym...(Rev. St Bir. 10)
- (12) ...& þan, as a worschepful doctour of diuinite *was* in þe pulpit & seyde þe sermown...(MKempe 185)
- (13) Anoper woman *was* of so euell lyuyng, þat scho dyd neuer good dede yn hir lyue (Mirk Fest. 61)
- (14) The V outward wittis ben in diuers parties of a mannys body. ffor si3t *is* in þe izen, heering in þe eeris, smelling *is* in þe nose, taastyng *is* in þe moupe, touching in þe nett of sinowis wouun, as it were, poru3 al þe fleisch of þe body.(Donet 11)

上に見るように there を伴わない存在文は各テキストに見られ、there 存在文の普及とともに急激に衰退した ‘NP+be’ 存在文ではあるが、この時期脈々と生き続けている。これは単に移行の過渡期に見られる一部の遅れの部分と見

合を見ていく。コーパスとしては新たに、五つの散文テキストを調査対象とした。³⁾

そもそもこの *there* 存在構文を形成する *there* は場所を表わす副詞の *there* が形骸化したものであると考えられるが、その *there* の意味の空洞化を如実に証明する現象として、副詞の *there* が同一節内に現れる *there* 存在文をその典型とみる。ここでは *there in* の例が、動詞 *come* に関しては *there* そのものの例が見られる。

(1) for there were there in but a few good dedes. (*GRom.* 407)

(2) But, for þer may no wyked spyryte come þer... (*Mirk Fest.* 89)

この *per/there* は意味的には全くの空白であるか否かという問題は諸説あり、Breivik に詳しいが、特に ME の書きことばに限って見れば何か場面設定的、導入的な、いわば、表層には表われない、「心理的意味」のようなものを持っているように思われる。従ってそれは新しく何かを、あるいは人物を話しの中に導入する際に見られる典型的なパターンとなる。人によってはこれを ‘*introductory there*’ と呼ぶ所以である。事実、今回対象としたテキストの中でも様々な物語りを集めた *Gesta Romanorum* に頻出する。

1. 接触節

現代英語において Jespersen が ‘*contact clause*’ と呼ぶ構文が特に主格に関して *there* 存在文によく見られるが、一般にこのような関係詞の仲介なく 2文が結合された文は史的には古英語から見られるものであり、したがってこれを主格関係詞の省略・欠落によって生じた構文とするのは当たらないが、存在構文に関して特異な形として今日にまで及ぶ。ここでも以下のものをはじめ、珍しいものではない。

(3) There was a knyȝt hadde a faire wife, þat tooke an oþer vnder him (*GRom.* 12)

(4) Þer is many that takyȝth noo kepe of thynges to come desyris to dye in cristen deth. (*Rev. St Bir.* 11)

(5) Ther was a monke xuld prechyn in ȝorke (*MKempe* 123)

(6) Þer was yn Englonde a kyng, was cleput Wylliam þe Conquerour (*Mirk Fest.* 17)

15世紀英語存在文の諸相

杉 山 隆 一

0. 序

それまでごく普通に見られた‘NP+be’構文による存在表現は13世紀半ばを境にして急速に衰退して行き、ものの存在・非存在を表わすとき書き言葉では少なくとも、there存在構文が主流となった。¹⁾ そもそもこの構文の特異性は、語順の固定化によって、語の位置が文法的意味を持つことになったとき、通常、冒頭にある主語領域を意味的に空白にすることにある。つまり、虚辞化し、実質的な意味を持たないper (there)が主語領域を埋めて文を構成し、ものの存在・非存在を表わす、単純判断に基づいた表現形式なのである。この場合per (there)が本来の場所を表わす副詞としての意味を完全に失った虚辞であるか否かの判断は文字の上では大変難しい。テキスト上では文脈に頼るしかないが、それも、もともと場所の副詞としても意味的には漠然とした空間を示すにすぎない副詞のthereであることから、しばしば曖昧であり、その指示領域は濃淡さまざまに大きく広がる。従って、この部分の判断の如何がこの種の調査の結果を大きく左右する危険がある。このような主観的要素をできるだけ小さくするために、小論ではthere存在文においては主に同一節内に場所を表わす副詞(句)を含むものを対象として考察を進める。勿論、全体としてはその条件に合わないthereを含む存在文が占める割合は小さくない。その意味ではここでも相変わらず問題は未解決のまま残るが、少なくとも限られた部分とは云え、ある程度明確な実態の把握が一つ可能であると考えられる。²⁾

小論ではこのような方法により統語論的にはほぼ現代英語の姿を整えたときの中英語後期(15世紀)におけるthere存在文の姿を一部記述することが目的である。単に構文の頻度を基にした統計的な観点からではなく存在文そのものの内容の吟味に主点を置き、この時期の、いわばthere構文の熟成の度